

自転車“縦吊り”で省スペースを実現 オランダ・ウィリーリフト社の駐輪装置

日時：平成 23 年 6 月 29 日（水）
場所：東京都港区・オランダ王国大使館
主催：一般社団法人 自転車駐車場工業会
協賛：NPO 法人 駐輪・駐車場情報センター

ヨーロッパで急成長中の注目企業による 日本初の製品プレゼンテーション

自転車先進国として知られるオランダから、画期的な駐輪装置が日本初上陸——6月29日、東京都港区のオランダ王国大使館で、オランダのベンチャー企業「ウィリーリフト社」が開発した駐輪装置のプレゼンテーションが行われた。

オランダといえば、言わずと知れた自転車先進国。通勤の自転車利用率は約3割、5マイル（約8キロ）以下の移動なら自動車ではなく自転車を使う人が3割、自転車通勤を奨励する企業には、政府が950ユーロの助成金拠出、自転車専用道やレーンの総延長は、日本の国道の半分に相当する2万9000キロ——オランダの人々にとって、自転車がどれだけ身近で、暮らしに不可欠であるかを示すデータは多い。

こうした状況に伴って、当然自転車関連産業も活況を呈している。今回、日本で初めての製品プレゼンテーションを行ったウィリーリフト社は2009年に創立され



プレゼンテーションを主催した自転車駐車場工業会の片岡大造代表理事

たベンチャー企業だが、既にEU内の7ヵ国、約40の都市で製品を販売。自転車を積極的に利用する国が多いヨーロッパにおいて、急速に存在感を増している。

では、プレゼンされた駐輪装置「ウィリーリフト」をご紹介します。最大の特徴は、垂直に自転車を吊り上げ、地面に対してほぼ90度の状態でロックされるという、その形状にある。自転車を立ててしまうため、かなりの省スペース化が実現する。一見すると駐輪するのは難しそうだが、ガススプリングを採用した自動流動構造によって自転車がスムーズに持ち上がる仕組み。電動アシスト付き自転車、スポーツサイクル、マウンテンバイクなどあらゆるタイプの自転車がとめられ、車体重量は最大35kgまで設置可能だ。装置はほとんどの壁に取り付けることができ、レイアウトのアレンジもできるという。

素材は、アルミニウム、スチールが中心。リサイクル率が高く、世界的な低炭素社会移行のトレンドに即したものだ。重量は1基は約10kg。現在はベトナムの現地工場生産し、ヨーロッパに運んでいる。出荷時はコンパクトなダンボールに梱包でき、20フィートのコンテナに1250基を収められ、効率的に輸送させられる点も地球環境への配慮といえるだろう。当日、プレゼンに参加した約50社の担当者の多くは、オランダからやって来た画期的な駐輪装置の説明に、メモを取りながら熱心に聞き入っていた。



日本初お目見えとなった「ウィリーリフト」。垂直に駐輪できることが最大の特徴



参加者との活発な質疑応答 日本市場展開への意欲を示す

プレゼンの休憩中には、多くの参加者が初めての自転車垂直駐輪に挑戦。慣れない動作であること、デモンストレーションに使われた自転車はかなり重かったことなどから、スムーズにいかないシーンも見られたものの、初めての駐輪装置体験に、全員興味津々の様子だった。休憩後に行われた質疑応答では、さまざまな種類の質問が寄せられ、参加者の関心の高さをうかがわせた。主な質問は以下のとおりだ。

- 日本市場で販売する場合のプロモーションの方法
- メンテナンスはどうするか
- 日本の既存の駐輪ラックとの併用は可能か
- 製品保証は付いているか
- 日本での販売価格はどのくらいを想定しているか
(ちなみにEUでの平均的な価格は1基149ユーロとのこと)
- ヨーロッパでは、具体的にどのような場所に設置されるケースが多いか
- 課金システム、ICタグなどの導入は可能か

こうした多様な質問に対して、ウィリーリフト社取締役のガブリエル・オクハウゼン氏は、ひとつひとつ誠実に返答。日本独自の認定基準をクリアすることなど、日本市場で流通させるにはいくつかのハードルがあるが、それでも積極的に製品展開をしていきたいという姿勢を感じさせた。これに対して、この日のプレゼンを主催した自転車駐車場工業会代表理事の片岡大造氏からは、東京都中央区日本橋蛸殻町にある工業会の展示場にウィリーリフトを展示しては、といった提案もあった。

約45分間に及んだ質疑応答終了後は、立食形式のレセプションへ。冒頭にプレゼンを協賛したNPO法人駐輪・駐車場情報センター理事長の石井 恵氏から、「今後、ウィリーリフト社の日本における窓口は、自転車駐車場工業会と駐輪・駐車場情報センターが務めますので、よろしく願い致します」との挨拶があり、引き続きウィリーリフト社と日本の駐輪ビジネス業界との、友好的なリレーションが保たれることとなった。

PP

当日は約50社から担当者が出席。盛況となった



ときおりユーモアを交え、熱気あるプレゼンを展開したウィリーリフト社取締役のガブリエル・オクハウゼン氏

ほとんどの出席者が駐輪の方法を体験



レセプション冒頭、乾杯の挨拶をする駐日オランダ公使のニンケ・トローステル氏